



中込貴博
呼吸器外科医長

の薬によって治療を進めることも可能だ。山梨県立中

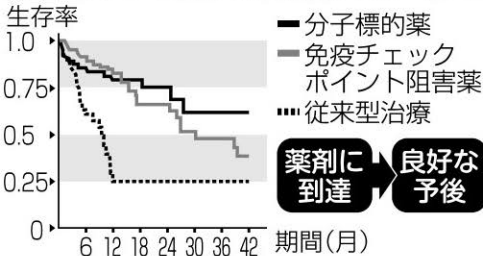
医療最前線 ゲムを追う

県立中央病院から

〈274〉

肺がん領域で広がりをみせるがんゲノム医療。遺伝子変異を調べるゲノム検査で効果が見込まれる分子標的薬が見つかる場合もあれば、免疫チェックポイント阻害薬という新しいタイプ

肺がんゲノム検査対象患者の生存率



薬剤に到達 → 良好な予後

中央病院呼吸器外科医長の中込貴博医師は「分子標的薬と免疫チェックポイント阻害薬の二本柱で治療成績は大きく向上している」と解

説する。同院が持つ機器では、肺がんの遺伝子変異の中で代表的な46種類をまとめて調べることができ、このうち

「キを解除し、免疫細胞の働きを活性化させてがん細胞を攻撃する仕組みだ。免疫チェックポイント阻害薬は分子標的薬と異な

り、抗がん剤と併用して用いることも多い。その組み合わせは複数あり、患者の体の状態や検査結果を踏まえて最適なパターンを選択する」という。近年は分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が充実し、患者に合った薬が見つかるケースは増えている。同院で機器を用いてゲノム検査を受けた肺がん患者のうち、4人に3人が分

薬物療法充実 予後も改善

肺がん領域 増える選択肢

7種類に対応した分子標的薬が既に登場している。自分のがんにあった分子標的薬が見つければ、最も有効性が期待できる第1選択の治療となる。

一方で特定の遺伝子変異によらず、がん細胞は免疫の働きに「ブレーキ」をかけて、免疫細胞の攻撃を阻止して増殖していくことが分かっている。免疫チェックポイント阻害薬はそのブレ

「薬による治療を進めた結果、根治を目指す手術が可能となった患者も一部に出ている」。外科医の中込医師自身もゲノム医療を含めたがん治療の進歩を肌で感じている。 Ⅱ第2、4木曜日に掲載